



| 輸送と環境 | 環境意識を抱いて安全運転を推進

【東京 IDN=市川太郎】

母カンガルーが生れた子供を自らのお腹の袋で大切に守るように、東京の長井運送のトラック運転手たちは、細心の注意を払って荷主様から委託された荷物を運んでいる。従って、今年「信義と感謝」で運送業開始60周年を迎える長井運送のトレードマーク「親子カンガルー」には、創業者のそうした気持ちが込められている。

「私たちが扱うのは『信頼』、当社のトラックに載せるのは『（お客様への）感謝の気持ち』、そして私たちが運ぶのは『安全と地球の未来』です。」と代表取締役社長の長井純一氏は言う。彼は、第二次世界大戦（1939-1945）後間もなく東京都港区に同社を創立した長井一美氏の長男である。



長井純一社長
資料：IDN-InDepth News

港区は、千代田区、中央区と並んで日本の戦後トラック産業の発祥地である。

「元陸軍士官として兵站（へいたん：Logistics）の大切さを理解していた父は、戦後起業するにあたり物流業を選びました。」と、長井純一氏は言う。彼は現在、全日本トラック協会の最大支部である東京都トラック協会の港区支部長を務めている。

彼はまた、若い頃、東京都トラック協会青年部の設立に参加し、第2代青年部本部長に選ばれた。「現在では他県のトラック協会にも青年部がありますが、当時としては初めての試みでした。青年部では、輸送と交通安全に関する勉強会を開始したり、様々なボランティア活動に従事しました。」

長井純一氏は、1995年に阪神・淡路大震災が勃発した際には、東京都トラック協会青年部を動員して支援活動に奔走、約15名の青年部メンバーが、水・テント・生活必需物資を満載したトラックを運転して東京と震災地の間を6往復した。



長井一美・静江創業者夫妻
資料：長井運送株式会社

長井一美氏が1950年に運送業を開始した当初は、戦後復興期によく庶民の手に届くようになったガム、洋酒、キャンディー等を扱った。

1953年に運送業免許を取得すると、長井一美氏は3台のトラックで、長井運送を設立した。そして4年後、長井運送は、今日では主要日刊紙となった聖教新聞の運送を開始した。また、1961年からスポーツ新聞の大手、スポーツニッポン新聞の輸送も実施している。

そして今日、長井運送の長年に亘る顧客である聖教新聞の本社には、「長井夫婦桜」と題した2本の桜が植樹されている。